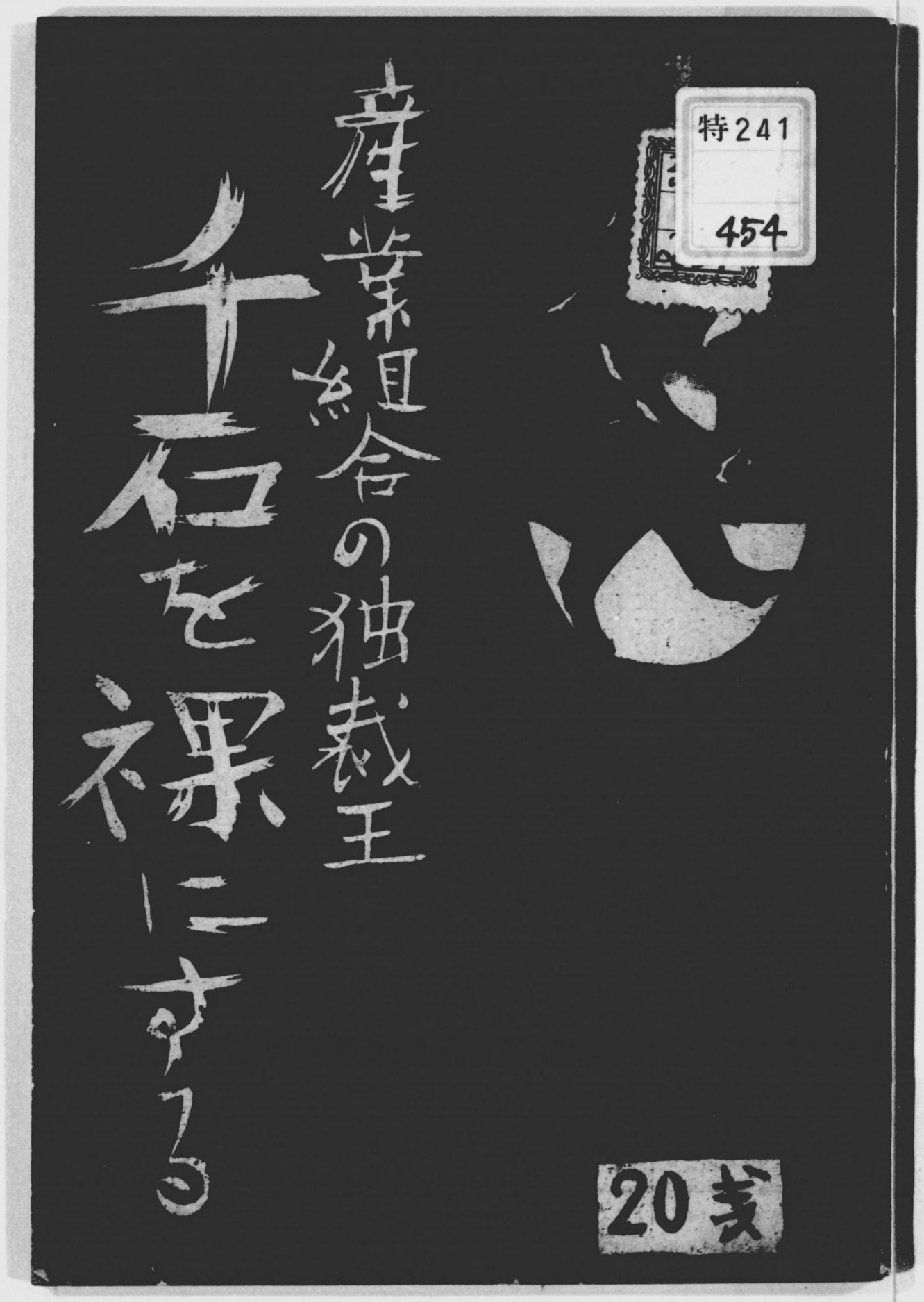

2

0026326000

0026326-000

特２４１－４５４

産業組合の独裁王千石を裸にする

山野三吉・著

経済更生新聞社

昭和１２

ADF

この著作物は、著作権者不明のため、著作
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

産業組合の独裁王

千石左衛門

454

20錢

特241
454

産業組合獨裁王 千石を裸にする

山野三

一、千石の英雄的人氣

現在日本の社會的スター十人獄獄戦、千石興太郎氏は十傑の中の一人に當選するかも知れない。（筆者は千石氏と一面識もない。）

過去十年前までは産組關係を除いては一個の無縁の存在にすぎなかつた彼千石の今日の人氣は一體どこにあるのか？

元々産業組合の最大地盤である農村では、彼の反資本主義的「産組論」に隨喜する數萬の大衆ファンがある。

彼が地方の大會等に臨むや、多數の組合員が「千石萬歳」を唱へて其の周圍に螺集して離れな

人氣投票をやつたら産組

帝國圖書館藏

農村問題大全新聞

◇全國産業組合の情勢一目瞭然！◇
◇全國農村更生運動唯一の機關紙◇
◇日本一の面白く生氣横溢の特異な新聞◇

農村問題を無視しては凡ゆる國内問題は解決出來ないとまで云はれてゐる、更に農村の生活防衛の特務機關として各國に類例を見ないまでに發展を見せてゐる産業組合の動きこそは、之に關係あると否とを問はず現下最大の關心事の一つとなつてゐる。

「經濟更生新聞」は此の「農村と産組」のオールトーキーとして識者の絶讃を博してゐる都會人たると農村人たるを問はず智識人必讀の新聞たるを失はぬ。

定價
一ヶ月 五十錢（送料共）
半ヶ年 三圓（全）
一ヶ年 五圓（全）

（日曜、祭日、休刊）

發行所
東京市麹町區内幸町一ノ六霞ヶ關ビル
經濟更生新聞社
振替東京六九、八四二番
電話銀座四三五六、四三七七番

かつたと云ふ光景、或ひは盟友族を先頭に列を作つて「我等の大將」を送迎する產青聯等の熱狂ぶりも決してウソの話ではない。

地方から上京する組合の幹部諸君にとつては中金ビルの一室に彼を訪ねて千石式愛嬌の二つ三つも貰つて歸ることは無上の感激であり、最大の東京土產ともなつてゐる。

曾つて、五・一五前後、財界の巨頭へのテロ手段がしきりと行はれ、恰かも我が組合界も反產運動の一大敵襲を受けて、兩者の抗爭漸く熾烈化しつゝあつたが、一日彼を見舞つた電報の文面に曰く。

「シンペン、ケイカイヲコフ」

とは、產業組合にも拔目のないお世辭屋がゐたものだが、產業組合獨裁王としての千石の絕對的人氣と壓力の程が窺はれやう。

一方、都市に於てはどうか？產組と云へば農村產組と思つてもよいほど、其の都市的地盤は薄弱である、僅かに消費組合、市街地信用組合等が、最近中小都市に發達しかけて來た醫療組合（賀川豐彥が其のリーダー）等を加へて點在してゐるにすぎないが、併し、

敏感な都市インテリ層は近來喧しく傳えられる產組の政治的、經濟的進出の中に、「時代のスター」千石を見出して彼の存在に少からぬ關心と興味を抱いてゐるに違ひない。

現に新聞の經濟欄を讀むほどの者には彼の名は既に常識であり、「中央公論」や「改造」等の高級雜誌にも千石の名が例の「會頭問題」や「新黨問題」等を機會にポツ〳〵出はじめて來た。

更に都市の中小業者にとつては、反產博士、渡邊鐵藏のヒステリカルな咆哮によつて、千石の存在は一種の假裝敵（いづくんぞ知らん、業者の敵は他に在るのだが）として實力以上に喧傳されてゐる。

今日では、軍部も官僚も、政治家も資本家も彼の動きを注目し出した、かくて全國一萬五千產組の獨裁王、千石興太郎は正に一個の英雄と化しつゝある、この英雄化されたる千石を裸にして人間千石の本質と產組オルグとしての彼の社會的役割を明かにすることが我々の千石論の目的である。

二、中央機關に於ける彼の地位

産組は全國一萬五千有餘の町村組合（單位組合）と約一百の聯聯の上に、其の全國的組織として八つの中央機關を持つてゐる、（事業機關六、指導機關二）

この八つの中央機關を通じて千石の息の掛らぬものは一つもない、と云つてよい。

第一に金融中樞の中央金庫では彼は僅かに評議員にすぎないが、前理事長、有馬伯（現農相）にとつては、よき意味での大久保彦左たり得たのであり、昨年六月、同伯を中央會頭に引入れることに依つて兩者の結合の度は更に強められた。

更に昭和八年末、最初の民間代表として靜岡信聯から中金入りした山本謙治の理事任命も千石の推薦が相當、物を言つてゐることは事實だ。

中央機關中の主力花形であり反産運動、目の仇の全購聯では彼自らが會長であり、米の全販聯生糸の絲聯にも夫々、常務相談役としてベンチコーチを承はり、比較的設立の新しい日柑聯、全乾聯、全糸聯の三機關も悉く産婆役として彼の手を煩はしてゐる。

一方、産組コンツエルンの最高統制部とも云ふべき中央會に在つては「首席主事」の名の下に久しく萬年職員の地位に甘んじて來たが、昭和九年春、宿望の理事昇格を達成し名實共に覇權を

掌握した、

デモクラシイの權化、前會頭、志立鐵次郎去り、彼と朴通ずる伯爵、有馬頼寧を後任に据える事によつて千石獨裁王國、背後の固めは一段と強化された、（有馬が農相となり會頭を辭任した今日に於ても尚然り）

更に以上の八大中央機關の連絡、統制のため「中央連絡委員會」を結成し、有馬を委員長に千石は委員兼幹事長を勤めてゐる、「産組閣議」の大臣兼書記官長と云つた格構である。

三、彼のオルグ戰術

千石支配の根は中央機關のみに止らぬ、彼は幾多の特務機關を持つてゐる。

彼の組織戰術の虎の卷には「協會」がある、「協會オルグ」と云はれるほど彼は好んで之を作る

曰く、全國信聯協會、市街地信組協會、農村産組協會、全消協、全醫協……等々と十指に餘るが、中でも反産運動に備える煙幕として、同時に亦、これに對する逆襲の奇兵隊たらしめる目的で作つた「全國農村産組協會」などは近來のタイムリー、ヒットだつたと云へやうし、最近では

ここが專ら產組の政治進出の足場になつてゐる。

傑作と云へば、いまでは雨ざらしの形だが、リ金準制の目的で作らした「全國信聯協會」がある、千石支配體制の外に在る組合金融資本の威力の前に流石の彼もホト〳〵手を焼いたと見えて全信聯の勢力を結集して中金突擊隊を組織したわけだ。

（時の理事長は貴族院から天下つた八條隆正子であり、副理事長は負けず嫌ひの川崎軍治が頑張つてゐた）

中金・信聯協會の喧嘩出入は暫くつづいたが、千石コーチの策略、圖に當つたかどうか、兎も角、中央機關中でも最も非產組的色彩の強い中金の官僚性への下からの一擊として相當威力を發揮したことは認めねばなるまい。

が、有馬理事長の現中金では、千石が中金側に立つて逆に信聯側を牽制すると云つた現象も見られるし、今では協會の事務所も東京信聯から中央會に移して千石の人質になつた形である。（有馬の入閣で後任理事長は石黑忠篤に決定）

面白いのは協會オルグの千石も自己の會長たる全購聯に對立する購販聯協會の設立だけはどうしても許さぬことだ、全國產組大會等に地方縣聯から提案されても上程に先立つて握り潰して仕舞ふと云ふ有樣。

こんなところにオルグとしての組織力ばかりでなく、支配者としての彼の獨裁力が見られるのであらうが、縣聯側だつて何時までも千石本位の統制に屈從してゐるわけには行かぬ、まづ全國でも一番鼻息の荒い關西側が昨年の「硫安値引要求」を契機に關西二府十九縣を打つて一丸とする關西購販聯協會を結成し、今年に入つても大阪支所（全購）の「權限擴大」や「硫安仕入れの合理化」さては「專任會長制の實現」（現在は千石が中央會と兼任）まで要求する騷ぎに協會好きの千石も完全に逆手を喰つた形である。

四、政治進出と千石

兎も角、千石は協會を澤山作り、之を自己の特務機關として驅使してゐる。

最初は名前ばかりで、必要に應じて中央會の職員が兼務で仕事をする程度のものだつたが、今では各協會とも專任職員を置き機關紙や會報を持つと云ふ充實ぶりで、「政治運動」も專らこゝ

らで引受け殊に前々議會の「米穀自治管理法案」や前議會の「國民健康保險法案」では農産協と全農協が第一線に立ち産青聯方面の産組便衣隊と呼應して彈力的活躍をやつてゐる。

最近これらの「協會派」の著しい擡頭に中央會の課長級は壓倒されがちで母屋に庇をとられる心配もあるとか、ないとか。

元來、千石がこの「協會」組織に着目したのは「中央會や各中央機關は農林省の嚴重な監督下に在り自由な活動が出來ない」と云ふ立前からで、其の目的は單に「反産」に備へる煙幕ばかりでなく主務省の目を遁れるための煙幕でもあるのである。

それかあらぬか産組首腦部の出過ぎた態度に對しては持前の强氣から少からぬ强壓を加へた前産組課長の田中長茂（現企劃廳、勅任調査官）でさへ「産組は政治運動をやるべからず、過去に於て幾多の弊害がある、但し別働隊としてやるのは別だ」程度の制肘しか加え得ず、暗に「農産協」による政治運動を容認せざるを得なかつたし、農林省としても此の種の特務組織の活用が政府原案の議會通過等に便利な點を認めて放任しておいたものとも云へやう。

前回の總選擧では全農協並に其の地方支部たる府縣農産協は「産組に理解ある士を選べ」をス

ローガンに産組關係候補者の應援に乘出し、六十一名の「關係議員」の當選を見、今回の總選擧では數名を減じたが尙六十名に近い盛況である。（この中大半は地方名士として名前だけ産組に片足突き込んでゐる程度のものが多いが）

更に過ぐる第七十議會には「産組院内ブロック」とも云ふべき「協同組合協議會」が、（民政）高橋守平、喜多壯一郎（政友）助川啓四郎、吉植庄亮（社大）杉山元治郎、三宅正一（中立）北勝太郎等を中心として産組に關心を有する各派代議士約五十名によつて結成されたのは注目に價しやう、かくて千石の代議士操縱も軌道に乘りつゝあるが如くであるが、先方も海千山千の議員商賣だ、逆に恰好の選擧地盤として「産組」を利用する算段もあらうと云ふもの、木伊乃取りが木伊乃にならぬやう御用心が肝要。

政治進出も調子に乘りすぎると意外のところで暗礁に乘り上げる、第七十議會では例の「新黨問題」も祟つて政民兩黨の喰はず嫌ひに掛つた形で、肝腎の「國民健康保險」は衆議院で骨拔きにされ、他方、産組の政治運動の行き過ぎが各議員から散々にこづかれたので、勢ひ農林省も俄に敏感になつて政治的行動を監視し出したので、今度の總選擧では、地方的な例外はあるが、總

じて熱が上らず中央としては前回同様ビラ、ポスターを送るほか、産組シムパと目される特定二十九候補に應援辯士を送る程度に止めた、産組本來の立前は「政治的中立」に在るが、この錢則と政治進出この關係に就ては別項「新黨問題と産組」で後述する。

五、産青聯と千石

千石はまた威勢のよい産青聯（註参照）を適當にコントロールして産組の對外的示威に効果をあげてゐる、産青聯全國聯合の初代委員長は千石であつたが「年齢制限」が内部から根強く主張されるとき六十幾歳の老年委員長では、流石の彼も氣が引けたか一回限りで辭め四十男の森廣之（鶴井の大地主の息子）に讓つたが、依然として背後から睨みを利かしてゐる、例の産組課税反對では、これ丈けでは物足らぬ書記局の連中がスローガン中に「大衆課税反對」の一項を加えるや、千石は直ちに撤回を命じたと云ふが、其後、自己本位の産組獨善が各方面の不評を買ひ「産組課税は大衆課税でないのか」などと冷かされる有様に遂に我を折つて先の撤回令を引込めたと云ふエピソートもある。（註、略語は本書末尾の「略語解説」参照のこと）

今議會に「國民保險」が出るや産青聯に對し醫師議員の宿舍に坐り込み？戰術を指令するなど産組便衣隊の活用は堂に入つたものだが、これがため却つて反産議員を硬化させたか、どうか、結果は餘り香しくもなかつたが彼らしい愛嬌ではある。

地方の産青聯代表等を丸の内會館あたりへ連れて行つて（勿論自腹を切つて）、青年相手にメートルを上げるのも彼の「娯樂」の一つらしい。

中央會の弗々で、發行部數百四十萬（東洋一）と稱する雜誌「家の光」の普及には町や村の青年聯盟員の熱心な無料奉仕（宣傳、勸誘から配達まで）が與つて力あるものだが、そんな事も手傳つて彼は「産青聯」をとても大事にする

が、中央機關の青年職員こ組織されてゐる「中機産青聯」は理窟が多いと云ふので彼は餘り好きでないらしい（この理窟を善用する機略こそ望しいが）、兎まれ、産業組合の青年達はアヂテーター煽動家としての千石の迫力には相當引きずられるらしいが、彼の産組理論に對してはどの程度に心服してゐるかは一寸疑問である。

六、千石獨裁の支柱

産業組合は株式會社と異つて資本的背景が物を言ふのではない、（一人宛の出資口數は産組法によつて制限されてゐる）

また官界の如く地位とハンコで人が動かせるわけでもない、組合員の發言權は形式的とは云へ一人一票で各人對等の立前になつてをり、從つて各府縣の地主的勢力を代表する縣聯幹部の文句も相當煩るさい、加ふるに「官製産組」の名の如く、官僚の干渉と天降りがある。

此のうるさい産組界に在つて千石は如何にして其の獨裁を築き、且つ維持してゐるか、換言せば千石獨裁の支柱如何？

彼の强味は全國産組の統制本部であり、組織本部である産組中央會を完全に自己の支配下に置いてゐることである。中央會は事業機關ではないが、産組界に於ける其地位は財界で云へば日本商工會議所と經濟聯盟を一緒にした位の統制力を有し、各府縣には其手足として大抵知事を會長とする支會（最近は自主化の聲が高まり民選會長も增えて來た）を持つてゐる。

中金、全購聯、全販聯と次々に産組の中央機關が出來る度毎に統制本部（中央會）の千石に呼出しが掛つて來るのは當然な話で何れも彼を産業役として設立されたものだが、中でも現に彼が會長を勤めてゐる、全購聯の如きは、悪いヒユだが、家事手傳が本妻に居直つた樣に、世話役から何時の間にかズル〳〵會長に迄ノシ上つて仕舞つたものである（勿論これは彼の實力の然らしむることであるが）

中央會は麾下の各府縣支會の外に全國一萬有餘の町村組合を會員とし、全國組合長會議の召集權を持ち産業組合の全面的指導に當つてゐる、（我國に於ける計畫經濟の走りと云はれる産組擴充五ケ年計畫、第二次三ケ年擴充計畫も此處で立案指導してゐる）

この中央會を本城とする千石が最近十數年間に中央地方を通じて生起した産組界の凡ゆる問題に頭を突込み、手を下して來たが、斯くする事によつて彼は自己の獨裁行進を確實にする自信と實力を得たのである。

東洋一？の雜誌社長

面白いのは、中央會は半分營利的な雜誌會社を兼業してゐることだ、と云ふのは、發行部數百四十萬、東洋一を誇稱する大衆雜誌「家の光」を發行し年々四十萬圓内外の純益を擧げてゐることである。

中央會の財政は年十萬圓の會費收入に農林省の補助金、其他の雜收を含めて二十萬圓に滿たぬ

が此の貧弱な事所は、雜誌經營から來る四十萬圓餘の特別利潤によつて始めて堂々たる風貌を呈し、組織本部は宣傳本部に早變りするのである、つまり金に任せて宣傳映畫やレコードの製作、教育用出版物、機關新聞の發行等、或ひは幾多の全國的會合、講習會等のふんだんな開催、贅澤な出張費、さては組合士官の養成を目的とする附屬產組學校の經營に至るまで、雜誌「家の光」は文字通り「產組の光」となつて中央會の宣傳的威力を數十倍にするのである。

宣傳映畫の第一シーシには千石のいかつい顏が大寫しで出て來るし、レコードには東海林太郎の「產組行進曲」とタイアツプして獨裁王の「青年に告ぐ」が吹込まれるし、中央會から出る殆んど凡ての出版物にはその冒頭に「千石興太郎」の名を見出さないことはない。

序ながら、「家の光」は專ら農村相手だが大衆向き營利雜誌の立前から「產組」臭い記事の少いのが自慢だが、千石興太郎の「產業組合戰線より」と題する御題目記事だけは、恰かも「文藝春秋」に於ける菊池寬の隨筆の如く、必ず每號トップに掲載され、百四十萬戸の配布家庭（押賣も？あるから「愛」讀者とは云へぬが讀者の數は三百萬以上であらう）を通じて「千石」の名が產組を好むと好まざるとに拘らず、讀者の眼に放射されるのである、（なほ「家の光」は全國一萬五千

の產業組合を配給ポストとし、一切書店を經由せず、從つて販賣手數料、廣告料の大半を節約出來るわけだ、但し普及奬勵費として各產組に交付する金額は每年拾萬圓に達してゐる、（定價は一部二十錢、內容體裁はキングの縮冊廉價版だが、農村版の外に都市版を有し、軍隊、工場等にも普及してゐる）

千石の城塞、全購聯

以上の如く、統制——企劃、指導——敎育、宣傳の三機能を有する產組中央機關（中央會）を掌握する事によつて「千石獨裁」の足固めは出來たとしても、中央會の實質は結局、產組の敎育指導機關にすぎぬ（法律的に組合に對して强制權や命令權があるわけではなく、會員組織の任意法人にすぎない）從つて中央會は千石獨裁の精神的支柱でこそあれ、その物質的支柱は亦別に在らねばならぬ、それは全國的事業機關としての「全購聯」である。

千石は中央會常務理事から一轉、こゝで全購聯會長に早變りするのである、全購聯とは全國購買組合聯合會の略稱で產業組合の商品仕入れの全國的中心である。その實質は生產に在るのでは

なく、いはゞ一種の大問屋にすぎぬが、取扱商品は大小百種に近く、金額は一億圓に垂んとしてゐる（出資金は五百萬圓、加入組合は約五千五百組合）

取扱ひ品目の第一位は、農家の現金支出の王様と云はれる「肥料」で、全國農家の金肥消費の四割を配給し、金額にして約七千萬圓だが、昭和十五年夏までには全消費の六割五分に達する豫定である。（政府の補助金としては肥料配給改善助成費として縣聯、單位組合分を含めて年四萬圓出てゐる）こんなわけで肥料商との摩擦が大きく、反產運動の最大目標となつてゐるのも此處である。

肥料部に次いで「雜貨部」は取扱額は二千萬圓内外であるが、大は農業用モーター、漁業用重油から小はキヤラメル、チリ紙まで扱つてゐる、雜貨中のスターは二、三年前から始めた「組合家庭藥」で既に百二十萬圓に達し、例の雜誌「家の光」を眞似てか、どうか產青聯を使つて各戸一箱、全戸配給を目標に猛烈な普及運動を行ひ、これがため富山賣藥をはじめ各縣置藥商の猛烈な反對を買つてゐる。（小學校には模擬購買組合を設け文具品を配給してゐる）

雜貨は自己生產のゴム靴を除いては何れも仕入れ品だが、マークは全部組合マークで賣出してゐる、產業組合は「中間利潤の排除」と云ふ事が立前となつてゐるが其の商品取扱ひは口錢主義

とは限らず、思惑もやれば投機もやる、（これは資本主義下の取引では或る程度やむ得ないことであらうが）、但し利益は利用率に應じて組合員に拂戻す特別配當制がある。

全購聯の剩餘金は毎年三十萬圓前後で、時には昨年（昭和十一年）の如く「琥安」の大暴落で大損をし、雜貨の利益でカバーしても尙ほ四萬圓の赤字を出したこともあり、中央會の「家の光」の如くボロイ儲けはないらしいが、何しろ取扱の金額が大きいので千石會長の資本家的活躍の舞臺も大きいわけだ。

「全購聯は大資本の合理的配給機關」だと云ふ批判もあるが、何しろ大口消費の組織者だけに財界各方面の注目するところであり、三井や住友系の財閥會社も觸手を伸ばして來る有樣で、現に肥料では相當の取引である。產業組合が儲けるのは購買事業が第一らしく、この儲けの親元である全購聯の會長として千石の、組合に對する經濟的壓力は事業分量の增大と共に益々高められ、大問屋が小問屋に對する如く彼の配みが利くわけである。

が、儲けさしてやる時は「全購聯樣々」であるが、反對に例の「琥安」の如く縣聯や組合に損でもさせやうものなら、「共存同榮」の組合看板そこのけの騷ぎで、先に引例した關西購販聯協

會あたりを先頭に「損失補償」要求だの「役員不信任」まで飛出し、剛腹の千石も散々手を焼かされ、縣聯操縦にはアノ手、コノ手と隨分細かい術策にまで氣を使ふのである、（その度毎に全購聯の職制は改組また改組とグラ〳〵するが會長としての彼の實權だけは依然弱められる事なく維持されて行くところに千石の老獪さと要領のよさがあると云ふべきか）

昨年は硫安暴落で大損をしたかと思へば今年は逆に暴騰で相當の痛手を蒙つた、これは肥料統制法への通信も手傳つてゐるが、商賣人はだしの大膽な思惑をやる子飼ひの主事、肥料部長萩原の見込外れの尻拭ひに會長自ら昭和肥料の社長、森轟昶を早朝、私邸に訪ひ受渡問題について懇願するなど產組獨裁王たるも亦難い哉と些か同情の念を禁じ得ない（しかも彼は全購創立以來の腹心、岡住吉――前全購理事、現香川縣聯會長――とも昨年の硫安問題を契機に袂を別つてゐる）

肥料資本との抗爭

かうした全購聯のゴタ〳〵は會長としての千石の統制力の問題よりも、根本的には肥料カルテ

ルに依存せざるを得ない、產組そのものの弱さに在ることは云ふまでもない、この決定的弱さの故に農村側の利益代辯者としての農林省への頼り過ぎとなり、延いては同省並に肥料統制法の肥料資本牽制力への通信となつて現れたとすれば、今回の硫安「公定價格」の結果が雄辯に物語る如く千石の認識不足は一肥料部長の思惑違ひ以上に責められねばなるまい（現實の硫安相場は政府が決定した「公定價格」を無視するかの如く、之より三十錢も四十錢も上廻つてゐる）

要するに、消費者の組織としての產業組合が、强力な肥料カルテルに對抗し得るためには、自ら肥料を生產するか（自己生產）、或ひは之を押え得る政治的力を持つかの二つより外はない、（後の場合は產業組合や農村だけでは出來る相談ではないやうだ）

「自己生產」は言葉では云ひ易いが、實際問題としては容易の業ではない、殊に硫安の如く高度の資本構成を必要とする近代化學工業では今日少くとも五千萬圓程度の固定資本の用意が無ければ出來ない仕事で、出資制限の立前を採る產組の經濟的實力を以てしては遺憾乍ら齒が立たない、また既に獨占過程に足を踏入れた肥料カルテルの、政治的、經濟的な凡ゆる手段を以てする自己生產抑壓策も考慮して置く必要があらう（全購聯は滿鐵系の滿洲化學株、五萬株を所有し取

締役に專務理事の藏川を送つてゐるが、これは名前丈けであまり發言權はない、何しろ總株數の一割を中　から借金して出資したにすぎず、肝腎の硫安は特別の便宜を與えて貰つてゐるわけではない（最近千石は滿化の持株增加を企圖し、其資金として全購聯の再增資を考えてゐるらしい）

消費組合通の本位田博士は、此の「獨占」打破の自己生產論者であり、產組內の理想派は近來旺んに「自己生產」を主張してやまないが、現實派の千石は常に「莫大な固定資本を要する自己生產よりも既存の會社を適當に利用して行つた方が有利である」と云つて之を輕く押えてゐるのは自己を知る者と云べきであらう。（千石は持株支配論者で、「滿化」の株を持つたのも其現れである）

が、彼の言の如く、肥料資本に「支配」される事なく、逆に之を利用し得るためにに、產組並に農村側の經濟的、政治的團結力を强化し、絶えず之を牽制する反カルテル運動の力强い存在に俟たなければならないであらう。

但しこれは極く一般的な見方であつて、全購聯は千石の言の如く肥料カルテルの內部的對立と間隙に乘じて巧に之を利用する戰術を用ひ、時に之に成功してゐることは認めねばならぬ（全購聯と最大の取引者である昭和肥料の如きは產業組合のお蔭で今日の大を成したものであり、新興

財閥の雄、森轟昶——昭和肥料社長——も往年の恩顧の手前、今でも千石の前には頭が上らぬと云ふ噂もある）

話は長々と横道に外れたが、要するに千石は指導機關としての中央會と事業機關としての全購聯の、二大中央機關を自己の統制下に併有する事によつて產組內に於ける獨裁的地位を完全に確保してゐるのである。この他に彼が多くの特務機關や產組便衣隊を有し、獨裁權を强化してゐることは前述の通りである。（「千石獨裁の支柱の項・終り」）

七、他機關との關係

販賣組合の中央機關「全販聯」には設立以來の相談役であり、現副會長の北川、（滋賀縣聯會長で千石の推薦で中央會理事となる）をロボット會長に祭上げ實權は千石に在りと見られてゐたが現有働會長が農林省から天下つて以來、千石の足も遠のき彼の獨裁體制の一翼が拔けた形だつたが千石の念願である全購聯再增資（現在の五百萬圓を一千萬圓へ）が農林省に押えられ、後の烏の全販聯の增資が先きだと云ふ事になるや、彼、千石相談役は日頃の鬱憤も手傳つてかどうか、縣聯側

と全販との間に介在して相當暴れたと云ふ噂もある、それかあらぬか、全販の增資は今以て目鼻がつかず、アンチ有働會長の放送もあるやうだが、此の全販增資の行惱みから全購、全販合併論まで飛出し、これが實現すれば農林省方面から大會長が天降りさうな形勢に流石の千石も狼狽てたか、最近は中央機關分化論を力說してゐるやうだ、何れにしても產業組合の出資制度には少からぬ矛盾があるやうだから、全購にしても全販にしても增資は現下の情勢では何人が衝に當るも相當困難である、次に中央金庫だが、農林省出の理事長は兎も角、副理事長の松岡は背後の大藏省の意向を代表して消極方針を堅持し、全購聯への金融にも相當難しい條件を持出すので、千石も仕方なく金融の方便として名目的再增資まで計畫するのである。彼の推挽が與つて力ある理事の山本謙治（前靜岡信聯會長）も中金の人間になつてからは千石の思ふ通り動かないやうだが、八條——川崎時代の中金（その頃は中金の官僚色が最も濃厚であつた）とは比較にならぬ圓滑さで、組合金融の大局的方針については千石の意見も採用されてゐるやうであるが、全產組側代表の名に於て千石は半官的な組合金融資本の獨善的貸付方針をもつと〳〵訂正させる必要があらう。（彼とよい前理事長の有馬が農相となつた今日特に然り）

組合製糸の販賣機關である大日本糸聯では常務理事の山崎は彼の後輩（北大）であり、役員會には必ず千石相談役の出席を乞ふ程であるが、小姑の多い糸聯で十年間、其地位を保つてゐるのは千石の庇護に負ふ所大であらう。

產業組合ではないが、友誼團體の帝國農會では、首席幹事の東浦庄治はつひ最近まで彼の部下だつた男で現に中央會囑託を兼ね產組と農會の橋渡しを勸めてゐるが、ユニークな農業理論家である彼は千石の農業問題顧問として重寶がられてゐる、他機關と千石の關係はこれでよいとしてお膝元の全購聯では專務理事の神戸八郎、藏川永充共に海千山千の活動家で千石會長も些か持て餘し氣味だが、彼の屈伸的統制術が物を言ひ、それに千石腹心の岡が去つてから却つて三者の關係は一滿化したやうだ。

八、官僚と千石

「天下り產組」の名の如く發生の歷史から官僚の手によつて設立され、政府の保護助成の下に

育つて來た我國の產業組合に在つては官僚の支配は絕對的と云つてもよい。

逓信省と放送局との關係は有名だが、畠の廣い同省などと異つて大した地盤を持たない農林省にとつては間口の廣い產業組合は絕好の官吏拂下場所で、現に役員全部が官選である中央金庫は勿論、各中央機關の役職員の有力な椅子の半分は古手官吏に依つて占められてゐると云つてよい。

かうした拂下官吏は農林省の產組支配網の有力な要素であるが、現職官吏の幅の利けることは民間團體の力が大きくなつて來た今日でも相當なものである。

中央機關の重要業務はもちろん、主事級の異動まで農林省の產組課長や肥料課長の諒解なしには遂行出來ないばかりか各機關の役員會には必ず監督官廳の出席を必要とする程で、全國的會合などで議論の多い縣聯會長でも臨席の主務省お役人に喰つて掛る程の元氣のあるのは滅多にない。農林省並に大藏省は補助金と監督權の兩刀を以て產組の官僚支配を固めてゐるのである。

千石が官僚の强壓に對していかに人知れず惱んだかは、今でこそ中金常任監事として孤影悄然たる高橋武美が產組課長たりし時、彼の「威張り屋」は當時有名なものだつたが、アノ負けず嫌ひの千石が、短氣な若殿樣の御氣嫌を取結ぶ家老の樣に高橋課長を持て餘したエピソードもある

位だが其の高橋が今や地位顚倒し旭日の勢にある千石を羨むが如く、しかもなほ「當時頗る消極的だつた千石君らに指令して全購聯を百萬圓から五百萬圓に增資させたのは僕だ」と自慢するのを見ても產組に對する官僚のヘゲモニーの一端が分るであらう。

千石の農林省に對する氣象ねは未だに拔けず、產組大會などでもアンチ農林省的な決議や要望が出ると彼の手によつて必ず骨拔きにされるか握り潰されて仕舞ふ有樣である。

高橋から山中（現動任課長）を經て前々產組課長、田中長茂（現企劃廳、動任調査官）は農本主義イデオロギーに立脚する持前の强引指導で產組を今日の黃金時代に導いた官廳側の功勞者であるが、妥協嫌ひで有名な田中は政治家肌の千石の便宜政策を極度に排擊した、がそれかと云つて高橋時代と違ひ、千石の社會的比重が數倍に飛躍した今日、主務課長とは云へ頭から押えつけるわけにも行かず、兩者のソリはあまり巧く合つた方ではないが海千山千の千石が、結局「負けて勝つ」と云ふ彈力戰法には流石の田中も苦笑したものだ、當時、「千石論」を物した「經濟更生新聞」の一節を引用すれば

「田中君は全農林省を通じて稀に見る信念の男であり、最も非妥協的な存在である。一たび政

策問題となると一歩も譲らない、之に反し、千石君は人一倍、我の強い男であるが、同時に多年の習練によつて多分の妥協性を體得してゐる、この興味ある對照が結局一つの調和を生んでゐるのは不思議であるまい。

農林省は千石君にとつて鬼門ではあるが、形式的には兎も角、實質的には曲りなりにも大抵千石君の要望なり主張なりが貫徹され全體的に見て彼の對主務省戰術は成功と云へるのである」と、

鬼門か楯か

が、實は農林省は鬼門どころか、逆に彼の最大の掩護者であり、千石は時に官僚を利用し、之を楯として自己の獨裁力を強化してさへ來たのである、（これは彼が官僚と民間團體との間に介在して準官僚と呼ばれる所以かも知れない）それは例えば今度のやうに全購聯の思惑外れに基因して硫安の受渡が困難となるや、彼は「五分引問題」を理由に農務局に駈けつけ、「農林省の強硬態度」と云ふ弱材料を以て肥料會社側を牽制するあたり、或は支會主事の操縦の爲には更生部

長の小平を說いて「普及主事」の俸給並に旅費助成をやらしたり、例の「會頭問題」（後述）では「小平の諒解」を援用して地方理事を自派に引入れ有馬伯の中央會頭擁立に成功するなど其の適例であらう。

産組が農林省に負ふ所大なる如く、千石もまた官僚の力を背景に今日の大を成して來たとも云へやう、とすれば今日では左程でもないが、官僚との對人的折衝で苦汁を飲む位の事は彼としては平氣の平左であらう。

但し、この事はナニも千石が官僚的人物だと云ふことではない、彼は苦勞人であり、役人としては南洋廳の技師をやつた位のもので、根は自由な民間人である、從つて準官僚と云ふよりも官廳と民間の緩衝地帶として産組の官僚化の緩和に貢献してゐることも否めないであらう、（面白いことには彼が會長をしてゐる全購聯が産組中央機關中でも一番官僚的色彩が少く、職員中には多數の古手小役人を抱え込んでゐるが、役員には農林省出身は僅かに專務理事の藏川永充一人にすぎない）

過去に於ける産組がさうであつた如く、そのリーダーとしての千石が官廳に依存するのは當然

であつたらうが、時によつて彼は依存どころか「農林省、頼むに足らず」となし同省の冢臓を逆に牽制さへするのである。

即ち例の「産組課税反對」では農産協を先頭に猛烈な全國的運動を展開し、馬場財政批判のトップを切つた形だつたが、流石の千石も日頃頼り切つてゐた農林官吏の冢臓には相當閉口したと見え「早く田中さんのやうな人が局長にでもなつて對外的に頑張つて貰はなくちや」と述懐したとか（當時田中は農政課長として産組行政の埒外に在つた）

小平氏

「官僚と千石の關係」で見落してならぬ事は經濟更生部長、小平權一（關東軍農業顧問を擔任）の存在である。農林省随一の産組イストと云はれる小平を庇護者として持つ千石の强味、しかも小平が最近七八年間も産組所管の主務局長として動かないと云ふ事が千石政策の一貫した遂行にどれほど役立つてゐるかは云ふ必要はあるまい。

千石は小平を早くから中央會參事（顧問）に祭り上げ、自己のベンチ、コーチとして何事にならず彼の諒解を得る爲めに十分如才なさを發揮してゐるらしいが、一方小平もノホホン居士の名

に似ず、目先の利く政策家のことゝて民間産組の實權者たる千石と手を握ることの利益な事位は百も承知の上であらう。（有馬農相の實現で同伯を通じて千石の農林行政への發言權は一段と增大した）

「新官僚と千石」の關係については小平だけで澤山だらうが、此派の御大と云はれる曾つての農林大臣、後藤文夫や農林系の大御所、石黒忠篤が彼に目かけてゐるのも事實であり、事務官級の少壯官吏の一部が千石の周圍に彼の農政ブレン、トラストとして動いてゐることも一言して置かう（「官僚と千石」の項終り。）

九、會頭問題

健忘症な組合人はソロ〳〵忘れかけてる頃だが、産組問題で近來新聞を賑はしたものでは此の「會頭問題」が一番であらう、事の起りは産組の自主的潮流の最高峯として當然留任を豫想された前中央會頭志立鐵次郎が昨年三月の任期滿了と共に突然辭任を申出た、千石は其後任として時の中金理事長の有馬頼寧（現農相）を中金との兼任の儘で擔がうとした事に端を發し、これが産組

内の正義派と傳統的自治派を刺戟して猛烈た「有馬反對」運動を惹起した事を指すものである、同じ産組陣營の有馬に對して何故アンナ熾烈な反對があつたか――其の理由を列擧すると

一、本來的な自由協同主義者であり、産組界の最大巨人として半ば信仰的な人望を集めてゐた志立前會頭が任期滿了とは云へ理由のない辭任を申出で、後任には從來の副會頭昇格の慣例を破つて監事から理事になつたばかりの有馬を擁立しやうと云ふのは、其間何らかの特殊的政治工作が伏在すべきこと（會頭問題の政治化）

一、民間産組の最高級であり官僚の干渉から獨立した超然的存在であるべき中央會頭に政府任命の準官吏である中金理事長を以て兼任せしめる事を不可とす（これは亦中金の理事長が農林省のみならず大藏省との共同監督下に在る關係上、大藏省の要求である「農村信組の共管」や産組課税が現實化して來た場合、中金との兼任會頭では之に反對し得ないと云ふ具體的配慮も伴つてゐた、此の反對理由は農林省の中堅級も支持するところであつた）

一、産組界の大先輩であり人格者である老副會頭、月田藤三郎への同情と彼を千石の政略人事の犠牲に供するに忍びないとする産組正統派の反對と千石の專横に對する反感（「有馬さんは今

度でなくともなれると云ふ聲）

一、政治家肌の有馬を會頭にする事によつて中央會の政治化を招來し、且つ驀進性行動家たる彼の出現によつて中央會の傳統破壞の逸脱を憂慮した事（この立場からの有馬反對は農民自治派とも云ふべき長老派に多く殊に有馬も千石と同型の機會主義者であるため逸脱への懸念が大きかつたと思はれる）

一、一方當の有馬に對しても産組界の特殊的存在である彼を、千石のロボット化し、徒に千石獨裁の旗持ちに終らしめる事は有馬の政治的生命に關する問題として寧ろ伯自身の爲めに會頭乘出しを避くべしとする説もあつた。（本年六月近衞内閣への入閣で就任一年で會頭辭任）

有馬伯

以上のやうな理由から所謂「會頭問題」が起り、志立辭任の昨年三月から有馬互選の六月末まで組合界の内外に渦を捲き起したのであるが、これは有馬に對する反對と云ふよりも寧ろ「千石獨裁」そのものに對する反對であり一大抗議だつたとも受取れるのである。

（事實、有馬反對派の一致した要望は千石の頭を押へ得る唯一人として今回、新中金理事長となつた前農林次官、石黒忠篤の出馬に在つたのだが、消息通から見れば火事泥を極度に嫌ふ石黒が、有馬をオシのけ會頭に色氣を出すやうな男でないことは分り切つてゐるし千石としても石黒では少々怖つかな過ぎて寧ろ月田を歓迎したであらう）

結局、六月末開かれた會頭互選の理事會では滿場一致と云ふ産組傳統の美風（？）を裏切つてまで多數決と云ふ非常手段を以て一、二票の差で有馬の當選を見たのである。面白いことには千石のお手盛り理事に近い地方理事は有馬派で、中央理事の大半は中立か反對だつたと云ふが、反對候補の月田が自ら有馬の爲に清く一票を投ずることによつて運命を決したのだ、この點はいかにも產組らしい協同精神の發揮で、有馬もまた入閣と同時に後任に月田を推擧した美談がある。

一役買つた岡實

右の理事會の席上、東日、大毎取締役會長たる理事の岡實（元島商務省局長）が眞向から有馬反對を唱えた事は周知の事實であるが、（岡の腹は選擧延期による石黒推擧だつたとも見られる

し或は昔からの朋友である月田を考へてゐたか不明であるが、兎も角、純理論に立脚する堂々たる反對で、流石の千石も之には太刀打ちに困つたらしい、）その他の理事の態度については產組の現職者が多いので、發表は遠慮するが、賢明なる千石は、有馬反對の意外に熾烈で根强い事を見て、その根抵に自己の獨裁への排擊が在ること、を看知したか、票決によつて有馬と決定するや直ちに彼は全理事に對し中央會内に於ける從來の獨裁を詫び、今後は毎週一回、正副會頭と常務理事（千石）三人合議の上、重要會務の決定をなすと云ふ獨裁訂正の約束をしたと云ふ、矢張り、千石でないと出來ない鮮かな藝當ではある。（この會頭問題が有馬に大きな箔をつけことは皮肉だ）

以上は會頭選擧の顚末だが、岡實は何しろ大新聞の社長だ、理事會のイザコザの内幕を新聞に素ッパ抜かれたら大變と考えてか、そこは千石らしい拔目なさ「内容は一切外部に洩らさざる事」を申合せて散會した、岡は新聞社長とは云へ自分の所の新聞記事に干渉したり、天下の公器を私したりする樣なケチな男ではない、千石の細かい手廻しに彼は呵々と笑つたことであらう。

從つて翌日の新聞記事は千石の發表通り滿場一致の決定を報じてゐるが皮肉にも先の「秘密申合せ」は地方理事の口から次から次へと洩れたが最後迄押し切つた千石の粘りは相當なものだ、兎

まれ「會頭問題」こそは偷安の夢に慣れた産組中央部にとつて一大警鐘として決して無益の騒ぎではなかつたのだ、正に雨降つて地固るの類か（今回は月田が會頭に昇格したが何も紛糾はなかつた、千石も有馬と共に副會頭になつた）

有馬擁立の眞意

斷つておくが、「千石の志立追出し」とか獨裁强化の楯として「私」のために有馬を擔いだとか――云ふ事は彼の名譽を傷けるもので全く誤解である。千石が筆者に語つたのは、かうだ。

「有馬さんは最初僕に會頭になれと云つた、併し中央會の會頭と云ふものは實力だけでは成れない」と、

有馬のこの言葉に千石が感激したとすれば有馬の方が役者が一枚上で千石も少し甘いと云ふものだが、兎も角彼が産組界の第一人者としての自己の實力を信じつゝも「實力だけでは會頭になれない」と云ふのはどう云ふ意味か。

中央會頭の資格には精神的、人格的要素、或ひは巨人的スーケルが必要だと云ふ意味なら何人

も同感であらう。但し有馬の如く華族樣であることが其の資格だと云ふならば我が産組中央會も「農事團體の殿樣擔ぎ」と云ふ恒例の名物症に感染したまでの話で、千石の有馬擁立の眞意も案外平凡なところに歸着するらしいが、本當のところ千石は有馬會頭によつて當時の合言葉であつた「庶政一新」を産組の上に移し植えやうとしたのであらう。

千石は有馬擁立に成功はしたが、その代り今期限り（三年後）で「中央會引退」と云ふ手痛い公約まで與えて了つた、老齢の彼の事とて會頭問題が起らんでも引退したかも知れないが、千石は自らを有馬擁立の犠牲に供したとも云へる、有馬新會頭は「僕は結局千石君のロボットさ」と洒々してゐるが有馬のこの呆ぼけたゼスチュアの裏に何となく千石が小さく映つて來るではないか、「千石さん、あんたが會頭になつたら」と云ふ殿樣はだしの有馬のお上手に釣られる千石でもあるまいが、若い有馬の爲に犬馬の勞を惜まなかつた老千石の純情に對しては有馬としても酬ゆる所があらう、（千石としては任期限りて常務理事は辭めても會頭になる手もある）

併し有馬が農相となつた今日、大臣級の人物を推した千石の面目は立つたわけで伯が再び野に下つた際は、千石はいつでも會頭に迎入れる肚らしい。

（「會頭問題」の項終り）

一〇、新黨問題と産組

新黨問題と云つても今では古い話だが、産組界で騒がれたのは、新黨運動の頭擡れの中に中央會頭、有馬伯の名が一枚加つてゐたからで、更に千石も一寸、關係があるやうに傳へられた。

この運動は政權の政黨からの遊離に焦慮する政界の有力者達が現在の各政黨を改組して萬年與黨的なものに再編成しやうとする計畫だつたらしい、新黨の總裁に近衛公を擔がうとしたことは既に周知の事實である。

當時、不振の昭和會にあつて前途を焦つてゐた山崎前農相は取分け熱心な新黨派と云はれてゐたが、舊藩主でもあり、山崎が岡田内閣の農相時代から親交あつた有馬伯を此の運動に引入れたのものと見られてゐる。

山崎の腹の中には有馬を引入れゝば其の傘下に在る産業組合も自づと新黨の地盤に吸收されると云ふ目算があつたか、どうかは知る由もないが、有馬としては産業組合を足場にして新黨に參加しやうと云ふやうなケチな意圖は毫もある筈はなく、貴族院議員、伯爵有馬頼寧として個人の

資格で之に關係したつもりである事に間違ひない。

不幸にして伯が産組中央會頭、兼中金理事長であつた爲め各方面から在らぬ誤解を受け、産組内に於ても傳統的鉄則である「政治的中立」に反する行動に非ずやと云ふ疑問が起きて來た。

本年一月の全國道府縣支會協議會では北海道代表によつて之に關する質問が出た程であるが、議長の千石は之に答へて「眞否の程は知らないが、仮りにそうした事實があつたとしても伯一個人の資格に於ての運動であらう」と輕く否定したが、其際彼は「産組をバックとする新黨運動は論外」である旨をハツキリ斷つておくことを忘れなかつた、

議會で問題化

然るに其後議會に於ても問題化し、高田耘平（民政）によつて

「中金理事長が政府任命で其の監督下にある以上、かゝる運動（新黨）には先づ中金を辭して後、參加すべきである、嚴密に云へば中央會頭も辭めた方が至當であらう、農林省としては十分取締るべきである」と追及の火の手が上り、時の農相山崎は有馬伯の爲めに辯明し「産組の團體

的政治行動は取締る」旨を答へた、高田君が更に「現職に在つて此の運動の渦中に投ずること」を警め「産組中金の信用維持の爲めにも容易ならざる問題」と云つてゐるのは批判として充分傾聽の要があるであらう、但し政友の河野一郎議員が「産組が數億の手元(餘裕)資金を有し、この資金の一部を以て政治運動に進出せんとするのは奇怪である」と斷定(?)したのは全然誤解で些か杞憂に基く質問としか受取れぬ、

其後、小平更生部長は民政鏑木議員の質問に對して「産組の政治干與は絶對に罷りならぬ、産組關係者の個人としての政治運動も充分監督する」とハッキリ答辨し新黨運動に關聯して提起された「産組と政治」の問題は一應解決された樣であるが、新黨問題が祟つて第七十議會の「國民健康保險法案」の審議では政民兩黨が硬化して同案が一拂きにされたと云ふ見方もあつた。

新黨計畫は政變や黨主難、政民の結束等で一頓座を來し、財界方面の支持薄も手傳つて近衛内閣の下でも結成の見透しは未だ明かでないが、有馬伯もまた公私の別を明かにし世上の誤解を一掃したことは産組にとつて此の上ない幸福であつたらう。

千石參加說

有馬に誘はれて千石も新黨運動に關係してゐたと云ふ說もあり、逆に有馬が積極的になるのを千石が引止めたと云ふのもある。

これは無論、後の方が本當と思はれるが當時「産組巨頭の新黨參加說」を取扱つた「經濟更生新聞」を借用すれば次の如くある。

「政治家、有馬と産組中央會頭、有馬とは別人だと云ふ論理は成立つにしても千石君の場合は有馬伯の如く政治的經歷がない丈けに、千石即産組で、産組的背景を拔きにしては千石君個人は考えられぬ程に兩者の關係は密接不可分である。

從つて、産組をバックとする新黨運動は論外——と内外に聲明した千石君自身が何で之に加擔などするものぞ!」

中略「産組の政治的中立と云ふ歷史的鐵則を蹂躙してまでも、未だ海のものとも山のものとも分らぬ政治投機に無用の冒險を敢えてし、産組多年の地盤と信用を滅茶々々にするが如き事は全

然考えられぬ、何ぞ千石君を知らざるの甚しき！」と

更に兩巨頭について次の如き興味ある一文がある、「有馬千石コンビに於ては前者は華胄界と云ふ特殊的地位に在るにも拘らず極めて進取勇敢なところに特色があり、後者は一見頗る猪突猛進なる如くして實は周到なる自重主義者たることに其の賢明を知るべく、このコンビは兩々相俟つて常道に正しきを得るのではあるまいか、從つてまた千石君の新黨參加說の如きは全然問題にならぬデマである」と

千石は本來現實派であり、我國産組の現實的指導者である彼は、既成政黨の力を無視しては、産組の政治進出も組合關係法案の議會通過も不可能である事位は先刻承知してゐる。從つて新黨などに釣られるほど單純な男でない事は無論だが、萬事に拔目ない彼の事とて新黨に對しても株の賣買ぎ位の氣持で政民以外の昭和會や社大黨に渡りをつけるのと同じ程度の注意を拂つてゐたのは事實であらう。

最近千石も些かオポチュニスト（機會主義者）化したと云ふ評もあるが、現實派の彼も林内閣の解散だけは意外だつたらしく、亦それだけ既成政黨は一ぺんに壞されて新黨時代が來るかも知れ

ぬと云ふやうな考えになつたのか、訪問者は一しきり彼の「政黨排擊」論を聞かされて驚いたと云ふが、其後の現實の情勢は現實派としての彼を再教育して呉れたであらう事は云ふだけ野暮であらう。（「新黨問題」の項終り）

一一、千石の性格人物

性格的に見て千石位面白い男はザラにあるものでない、彼特獨の人間的ユーモアには反對者と雖も一脈の微笑と親味を禁じ得ないであらう、本論の目的は獨裁王、千石を通じて今日の産組の動きを見るに在つて、彼に對して個人的興味を集中することは本意でないが、簡單に彼の性格線を素描するに止めやう。

千石は生來の闘士である、從つて勇猛果敢な闘士的性格を持つてゐる、若い頃の彼は頗る喧嘩早い男だつたそうだが、三四年前までは何かの協議會でも氣に喰はぬ事があると相手に向つて、「馬鹿野郎」と怒鳴つたものだ、我々は幾多の會合に於て彼の一喝に縮み上る縣聯會長や地方主任官（農林主事）を見て來た、持前の癇癪もあるが「何を、此奴！」と云ふ不敵の氣魄が物を云

ふのだ、相手に充分物を言はさず頭から押えて掛る強壓態度には敵の機先を制する「やくざ劍法」の面影があつた。

彼の面構えは一見してブルドツクの獰猛さと同時に秋田犬の精悍さを連想せしめるが、其の顏も年と共に次第に柔和性を帶びて來て性格的にも圓熟味を加え最近では滅多に怒るやうな事はなく顏にはカツト來ても口に出して怒鳴ることはまづない、しかも相手を押えるどころが、逆に持ち上げて輕く受け流すと云ふ洗練された柔軟戰法さへ體得して來た、これは習練による進歩に違ひないが、元來彼の爆發性は瞬間的で今怒つたかと思ふと、一分後には相手の御氣嫌を取つてゐると云ふ極めて便利な安全辨を具有し、それが爲に「よく怒るが、しかし後に殘さぬ千石さん」と却つて好感さへ與へるのである。

これは一面、彼が其の鬪士型と一見相反する妥協的性格を併有し、此の妥協性の應變な活用に依つて千石は幾多險惡なる對人關係のピンチを切拔け來つたものと見るべく、一徹な鬪士型の人物が多く世に容れられないのに反して、人一倍短氣で負けぬ氣の彼が人事關係の面倒な產組界に在つて一度も失脚の浮目を見ず今日の大を爲すに至つたのは確かに彼の持つ硬軟兩面の政治家的

運用が物を云つてゐるとべ云ふきである。（これは獨裁者と雖も徒に自我を固執するばかりが能でなく、周圍との適度の調和が必要である事を敎へる）

短氣で通つた彼も、中央會十八年の在職中、一人も首を馘つた事はないと云ふが、一方全購聯では短氣と「獨裁」に任せてかどうか、一寸した事でチョイ〳〵首切や左遷をやるのは如何？、全購聯では粹な千石會長にも似ず、男女職員の不義は「お家の法度」であり、純情派の某課長が抽象的な產組役員論を發表したからとて直ちに極刑を課するのは、彼自ら力說する「產組人としての對等性」を無視し產組役職員を以て重役と使用人の營利會社的關係に一律化するものではあるまいか！

秀吉式と家康式

むうした點は、自己の感情に任せて驀進すると云ふ秀吉式專斷に似たるものがある、秀吉が爲政者として落第點であつたにも拘らず、豪放洒脫な英雄として萬人に親まれてゐるやうに、千石も技巧のない直情徑行家で、性格の陽性でユーモラスな點では全く秀吉式と云つてよい。

所謂「唐竹を割つた」型で腹に一物も残さない、ゼスチュアをよくやるが、それがゼスチュアであることが分り切つてゐて、いかにも天眞爛漫である。

が、これは逆に彼の短所ともなつて、癇癪を腹にジット押えて、云ひたい事を蔵ひ込んでおくと云ふ太い腹藝には稍難色を示してゐるやうである。

「大膽にして細心」なることは千石の強味であるが、細かい事まで自分でやらねば氣が濟ます事を思切つて人に任せられないと云ふ小獨裁官的な干渉癖も指摘されやう、勿論これは千石の性格に對する一般的指摘であつて、中央會に於ては昨年の職制改革によつて、彼は萬事干渉の小獨裁を訂正して、大綱のみをシツカと握つて、他は組織による運行に任すと云ふ大獨裁の域へ進んだと云つてよい。

この秀吉式性格に加ふるに彼が家康式周到性(配慮)を具備してゐることは、千石獨裁にとつて「鬼に金棒」であらう、即ち彼の部下統制には、譜代腹心には祿高を少くし、其代りに權力を以てし外様には大祿の代りに閑職を與へる——と云つた家康式の配置が無意識的ではあらうが往々用ひられてゐる。(但しこの手は必ずしも悪いと云ふわけではなく、統率者の信認を部下職員に公平

に分配しやうとする苦心の發現でもあらう)

この傾向は中央會に於ては職制改革後、一掃されたが全購聯の再改組には此の策を弄しすぎた嫌ひあり職員部長制に依つて役員の督軍化を牽制せんとするなどは巧妙の手ではあるが、些か目前の統制に捉はれすぎた觀がある。

兎も角、獨裁王が豪放性の裏に蔵する細心な周到性こそは、秀吉や頼朝式の强權が暴露する案外の脆さをカバーする獨特の武器である。

自己に楯つく部下や反對者を重用して藥籠中のものと爲す懐柔政策も時に彼が用ひる手であるが千石の人事統制は概して公平主義である、彼と同學の北大閥(札幌)が世上云々されるが、これは偶然的人事に對する形式的批評にすぎない、(因に北大出身者は有元、宮城の二主事が中央會に、全購聯に彼の著述助手である島田、糸聯に常務理事の山崎がゐるにすぎぬ、尙この際、彼の腹心と云ふべき直系を物色すれば案外少く、全購聯に奥谷——總務部副部長——と肥料部長の萩原があり全販聯に生田——名古屋支所主事——位であらう)

千石には稚氣がある、賞められゝば無邪氣に喜び、貶されゝばム になつて辯解する(例えば

渡邊反產博士との論戰の如き、新聞のゴシップ記事まで氣にするが如き、或は協議會などで興奮しすぎて相手に揚足を取られる如き）君子も道を以てすれば欺かると云ふが、彼の態度は國定忠次ではないが一見スキだらけだ、だからと云つて甘く見て飛び込めば、したゝかに叩きのめされるであらう、吾人は猛優千石の、この稚氣と粗放性の中に如何なる名優にも見出せない親味を感ずるものである。

最後に千石が天才的な社交家であることも特筆に價しやう、悪く云へば八方美人式だが、誰にも如才なく愛嬌を振まく。政治的ゼスチュアはあまり上手の方ではないが、社交的ゼスチュアは堂に入り相手を感激させずには置かない魅力を持つてゐる、地方の產青聯の猛者や若い新聞記者などは此の手でコロリと るとか？

殊に彼の場合は、空お世辭の連發だけでなく、自腹を切つての御馳走政策も忘れない、氣前のよい事は彼の人徳で月給を節約して小金を溜めやうナドのケチな考へは毛頭ない（經濟的には散々苦勞し、曾つて恩給縁ぎのため南洋廳行きまでやつた彼であり、今日でも此方では大して惠まれてゐるとも云えまいが）

地方から上京した連中を東京會館に連れて行つたり、忘年會に中央會の全職員を雅叙園あたりに招待するなどは千石獨特の消費趣味らしい（今では中央會も人數が殖えて千石の自腹丈けでは忘年會も出來ないと云ふが）

「モダン老年」の名もあるが、ネクタイヤ靴下の派手好みは云ふに及はず、外國映畫が趣味、このモダン趣味は若い者とも好んで語り新智識を吸收し、新刊書にも目を通し、時代の空氣に觸れやうとする進歩的努力ともなつて現れる。

彼の性格論はザット以上の如くだが、この性格的迫力と人間的ユーモア、天才的な社交性、「オルグ千石」で見たやうな組織的才腕が一體となつて彼の獨裁支配の精神的支柱を形成してゐるのである。千石獨裁の物質的支柱に就ては既述の如し、（「千石の人物性格の項」完）

一二、略　歴

千石の半生は苦闘そのものの歴史である、明治二十八年北大（札幌農學校）を出て、農學校の

英語教師、國立農事試驗場の熊本支場、愛媛、島根の各縣農會の技師、幹事を轉々し、其間瀕死の大病を患ふなど辛酸を嘗め盡した。

島根縣農會にゐた頃、縣下産組の設立指導に關係し、ここに始めて組合との緣が出來たが、其後は全國産組大會等で委員長を勤めるなど千石の勇名は次第に高まつて行つたが、當時は産組よりも農會の闘士として有名だつたらしい、島根から時の内務部長が南洋廳に轉任する時千石も同行し同廳の技官となつた、これは殖民地稼ぎで恩給年限を早める目的で彼自ら志願したものらしく時既に地方廻の小役人生活に見切をつけ、志は中央に在つたと思はれるが、此の南洋行きは悲境時代の千石を知るに相應しいエピソードである。（彼の唯一の官等である勅六等は其時の賜物である）

地中の蛟龍は遂に第二代會頭、志村源太郎（元勸銀總裁）に依つて拾ひ上げられ、大正九年、千石は平主事として中央會に入つた、その頃中央會は存在すら認められぬ微々たるもので、千石は勿論何人も今日の發展を豫想し得なかつたであらうが、兎も角志村源太郎なかりせば現代産組の獨裁王も一介の不平の徒として南洋邊りで埋れてゐたかも知れない、千石の場合なぞ人生のチャンスが實力者に惠んだ一つの好適例であらう。

神田三崎町の借家からオワイ船屯する飯田橋々畔、牛込揚場町の獨立事務所へ、それから現在の丸の内中金ビルと中央會の事務所が移轉する毎に千石の社會的名聲も正比例的に高まつて行つた。

最後の上りが昭和十三年末に竣工する近代高層建築、中央會館（地上七階、地下二階、總工費二百萬圓）であらうとは往年の見すぼらしさに引較べて千石自身、感慨無量なるものがあらう（建築費の三分の二は雜誌「家の光」の利益金並に借入金を以て充て、殘る三分の一が全國各府縣信聯の出資となつてゐる）。

千石の出生地は東京、しかもお江戸の眞中、丸の内で生湯を使つたと云ふのが彼自慢の種、父は越後の勸王僧だつたとか、本籍は現在島根に移してゐる、彼は植物學專攻の農學士で北大同期の逸材には現北大總長の高岡熊雄博士、大村滿鐵副總裁があり、彼を加へて出世三人男と云つたところであらう。

要するに千石は軍人にしても政治家にしても實業家にしても第一級の人物であらうが、偶々、彼の飛込んだ世界が「産業組合」と云ふ狹い領域であつたことは、産組にとつて幸福であつたら

ろが人材拂底だと云はれる現代日本にとつては一つの損失であつたとも云へやう。

一三、千石のイデオロギー

彼にはイデオロギー（思想）はないと云つた方が適當かも知れぬ、徹頭徹尾、實際家である彼に理論を求めるのは無理であり農村問題、卽産業組合の彼にとつたイデオロギーが必要である筈はない。

最近彼はよく著作するがそれは千石イデオロギーの發表と云ふよりも彼の信念の披歷であり産組オルグとしての彼の活動記錄なのである、從つてこゝで千石の思想自體を解剖することは、それほど重要ではない（彼の著作が日本産組の活動史として意義あることは勿論であるが）

「農村に於ける資本主義の勢力を排除」すること、その爲には産業組合の力に俟たねばならぬこと、これが千石の根本信條らしい、（産組による農村經濟の自主的統制、農村經濟の協同化―等々の言葉を好んで用ひるやうだ）

頭のよい現實派である彼は、産業組合が根本的に資本主義と對立するものであつたり、之に代り得る經濟組織であるなどと云ふ夢想的觀念は持たないでらう、たゞ産業組合によつて資本主義の弊害を修正すること、資本主義の重壓に惱む中小産者の生活を産業組合によつて防衛してやることが彼の理想であり、目標であるまいか。

産業組合に全精魂を打ち込んでゐる千石にとつては、産組の發展が農村の資本主義化を却つて促進する結果さへもたらすものであり、農村にどんな分解作用を起してゐるかに就いては深く考へてゐないやうである。

産業組合の發展は多くの組合人が考えてゐるやうに資本主義を農村から排除することを意味しない、逆に遲れた農村を之に對應せしめることによつて中間利潤を排除し、大資本と農業との直接的結合を促進するのである。　購買、販賣の各部門に於て然り、（福岡縣の某村の如きは産組の發達で小賣商がなくなり村の兒童は組合の購買店以外は「店」と云ふものも知らないと云ふ）

我々は此の正直な意味に於て産業組合の役割を認識し、資本との直接的結合により節約せられた中間利潤を資本の側にではなく、農業者の側にヨリ多く取り戻す方向へ！更に之を農村の上層

部のみならず、廣く下層部へ均霑せしめる方向へ産業組合の力を發展せしめることが必要なのであらう。（信用組合は政府の低利資金を通じて國家資本との結合を媒介する）

これは千石が「産組の大衆化」を唱へ農村經濟の協同化を力説することと一致するであらうが「自主化なき大衆化」は結局、「佛作つて魂入れず」であり、組合員の數を殖すことが大衆化でないことは勿論である、大衆の生活防衛の爲の協同組織として今後の産組をいかに發展せしめるか否かが千石をして眞に大衆的英雄たらしめる鍵ではあるまいか。（今日の農村産組の指導權は多く地主層に握られてゐる）

大衆に見離されたら官僚に見離されるよりなほ悲慘であることは賢明なる彼の最もよく知るところであらう。

「僕は官僚フアツショや暴力フアツショではない、大衆フアツショだ」と豪語する彼の眞意も此處にあるのであらうが（フアツショと云ふ意味を彼はよく知つてゐないかも知れぬ）、強力統制のフアツショとの産組本來の「自主協同」とが一致するものか否かは十分檢討を要する問題であり、千石の獨裁もフアツショではなく、協同組織の上に立つ力の偉大さを物語るものではあるまいか。

千石の強味と弱味

千石が近代産組の創設者であること、即ち素朴な救濟機關的存在にすぎなかつた明治—大正時代の産組をして、今日見るが如き整備せる經營形態（四種兼營）と全國的聯合組織を確立せしめたこと——こそ永久に沒することの出來ぬ彼の歷史的功績であらう。

産組を通じての大衆の政治的、經濟的啓蒙と云ふ事も、時流を巧にキャッチする彼の鋭敏な組織的才腕によつて開拓せられた大きな仕事であり、最近喧しく云はれてゐる「産組の政治進出」も其の所産であるが、こゝにはまた今後「行き過ぎ」に對する警戒が相當必要であり、産組本來の發展に將來禍根を殘さぬやう指導者の自戒が希ましい。

今後は、この膨脹産組をして質的に強化、改善すること、頭でつかちの補助イズムの訂正（中央機關が大きくなつた割に下級機關、殊に單位組合は伸びてゐない）、産組受益の貧農層への均霑……等が當面の問題であり、更に産組中心の農村文化の開拓、都市方面への産組普及、利用事業によ

いか。

る社會的施設の擴充等も殘された課題であらう。

産組は千石にとつて全生命であり唯一最後のものである。ここに千石の强味と弱味が同時に併存するのである。

「理窟はどうあらうとも、産業組合でなければ農村は救はれぬ——これが私の信念である」この信念の强さにこそ産組を全生命とする彼の眞面目がある、が希ましきは信念を裏づける理論的根據である、然らざれば獨裁者は往々にして神がかりになる虞れがある。いつの場合でも自己陶醉は禁物。産組、卽全農業問題であつては話は餘り簡單すぎる、産業組合の活動が農村の流通部面にのみ限定せられて土地問題等に對しては全く頰冠りだと云ふのは一般に指摘されることであるが、現に千石も産組外の農業問題、例へば第七十議會に提案された「農地法案」の如きものには頗る無關心だし、産組課税には眞向から反對しても農村の税制改革の問題には餘り氣乘りがしないのは些か産組獨善で視野が固定しすぎてはゐないだらうか！（中央農林協議會も出來た今日、この方面への彼の活躍は各方面の期待する處）

産業組合が組合官僚や地主層丈けのものではなく眞に大衆のものとして發展するためには、以

上のやうな農村の根抵に横たはる生産上の根本問題の解決への協力が必要である事位は先刻承知であらうが、産組指導者としての彼は只自己の分を守ることを最善としてるのであらうか。

千石たるもの、徒に「狹義」産組運動にのみ捉はれず更に「廣義」産組運動にまで乘出すべき秋ではないか！、（勿論これは産組本來の領域を超えて政治的逸脱を敢えてせよと云ふのでは決してない。）

兎まれ彼の持つ卓拔せる觀察力と組織的頭腦を産組外にハミ出して大局を達觀することは獨り千石の爲めのみならず全産組の幸福ではあるまいか！

最後に筆者は裸にする積りの千石論が逆に彼を偶像化せんことを怖る、所詮は彼も産組發展の時流に棹す好運のスターであり、（賢明なる彼は夙に之を知る、彼の偉さは之を自己の力として思ひ上らざる處に在る）人間千石また一脈の弱氣を藏する諸君と同じ組合人であることを知れ！

が、この事は産組界の第一人者としての彼の實力と眞價を毫も割引きすることにはならないであらう、産組の千石をして日本の千石たらしめる日は遠くないであらう。

（完）

略語解說

中金——産業組合中央金庫
全購聯——全國購買組合聯合會
全販聯——全國米穀販賣購買組合聯合會
糸聯——大日本生糸販賣組合聯合會
中央會——産業組合中央會
日柑聯——大日本柑橘販賣組合聯合會
農産協——全國農村産業組合協會
産青聯——産業組合青年聯盟
全國聯合——右聯盟の全國聯合
國民保健——國民健康保險法案
全醫協——全國醫療組合協會
全消協——全國消費組合協會
信聯協會——全國道府縣信用組合聯合協會
四種兼營——信用、購買、販賣、利用の四事業

全國産組概況

組合數	一萬五千四百
組合員數	六百十萬人（全國農家の八割包含）
出資總額	三億四千萬圓
貯金	十五億一千萬圓
貸付高	十億六千萬圓
借入金	二億六千萬圓
販賣高	四億九千萬圓
購買高	二億八千萬圓

（昭和十一年末現在）

◇編輯便り◇

◎時代の寵兒、或は怪物として最近異常に注視されてゐる産業組合の僞らぬ姿を、指導者千石を通じて描き出すことが本書の目的である。

◎從つて內容中、時に千石個人と直接關係ない事柄もあり、勢ひ堅い部分もあらうが、著書の狙ひは讀書界の豆戰艦、パンフレットの特色を利用して一つの經濟講談として産組外の人にも面白く讀めるやうに書くに在つた。

◎今後産組は勿論、農村問題を中心にピチ〳〵したものを出す積りだから大いに期待して戴きたい、なほこの「千石論」の批評も聞かして貰えれば幸甚である。

産業組合の獨裁王
千石を裸にする
（定價二十錢、送料三錢）

昭和十二年六月七日印刷
昭和十二年六月十三日發行

著者　山野三吉
發行者　鈴木金吾
東京市世田ヶ谷區大藏町一六四
印刷所　篠原印刷所
東京市芝區愛宕町一ノ三四
發行所　經濟更生新聞社
東京市麴町區內幸町一ノ六
振替東京六九、八四二番
電話銀座　四三五・四三七番

（不許複製轉載）

發賣所　今日の問題社
東京市芝區田村町四丁目十八番地
振替東京五九、七四八番
電話芝　三〇〇七番

東京鐵道局公認鐵道養保會（各驛ホームスタンド手販賣）
鐵道弘濟會　鐵道各驛
會產授道鐵

● 大取次 ●

森田書房　富田報英堂　竹菊文金堂　大阪屋號　大坪惇信堂　新正堂
瀨川書店

經濟更生新聞社版